

宋詩における「思旧賦」

“Sijiu Fu (思旧賦)” in Poetry under the Song Dynasties

河野哲宏

要旨

向秀「思旧賦」が典故として詩に用いられる際の表現は、大きく「山陽」に一字足した「山陽」型と「鄰笛」を用いる「鄰笛」型の二つに分けられる。六朝期には顔延之「五君詠」「向常侍」で用いられた「山陽笛」を規範とした「山陽」型が優勢であったが、唐代に入ると「鄰笛」型が優勢になる。前稿にて、その理由を近体詩の成立・普及による韻律の整備とそれぞれの型が成立するための文字数などにより、「山陽」型に制限されたことによることを指摘した。本稿では、唐詩において見られた傾向が妥当なものであることを宋詩の用例を見ることで確認し、さらに、宋詩における意味の派生等の典故としての運動に言及する。

キーワード

宋詩、思旧賦、向秀、鄰笛、山陽

はじめに

筆者は、以前、六朝・唐の詩に見られる向秀「思旧賦」に基づく典故を用いた詩作品を考察した^①。それら諸作品を通覧した結果、以下の点を認めることができた。

- ① 詩という表現形式に初めて「思旧賦」が用いられたのは、劉宋・顔延之「五君詠」の「向常侍」である。
- ② その後、六朝期では、「五君詠」にて用いられた「山陽」型が優位を占め、「鄰笛」型はあまり見られない（七首―二首）。
- ③ 「思旧賦」に基づく典故の意味として、「今は亡き友を悼む」・「笛の音の素晴らしさ」の二つが見られるが、選された表現と意味に特定の繋がりはない。
- ④ 「山陽」型が優位を占めたのは、「五君詠」が収録された『文選』やそれに先行するアンソロジーの編纂が一つの理由ではないかと推測できる。
- ⑤ 唐代に入ると、「山陽」型も引き続き用いられるが、「鄰笛」型が優位を占めるようになる。
- ⑥ 六朝期と同様、意味的には両表現に用いられる際の差異はない。
- ⑦ 詩という表現形式における、六朝期から唐にかけての大きな変化の一つは、韻律の整備であり、二字で「思旧賦」を示し得る「鄰笛」型に対して、三字必要とする「山陽」型では、句中において用いられる位置のバリエ

「シヨンが乏しく、「鄰笛（○●）」と「山陽（○○）」という平仄から、「山陽」型は、下三連不可を避けるために、近体詩では使用箇所が制限される。

⑧よって、唐代に入って「鄰笛」型が優位を占めるのは、韻律が整備されることで、「山陽」型の使用に制限が掛かったためと考えられる。その結果、六朝期に「鄰笛」の使用が一例見られはするが、唐代に至って、詩語としての「鄰笛」が成立したように見える。

以上の考察が、妥当なものであれば、唐代に続く宋代においても、同様の傾向が見られるはずである。本稿は、六朝期・唐代の諸作品に引き続き、宋代の諸作品における向秀「思旧賦」の典故としての用いられ方を確認し、韻律・意味の点から六朝期・唐代の詩との差異を考察するものである。

以下では章を分けて、宋代の諸作品を韻律の面と意味の面から考察を進めていく。^③

第一章 韻律の面——「鄰笛」型と「山陽」型

本章では、宋代の諸作品における「思旧賦」が韻律面において、どのような用いられ方をされているか、特に、「思旧賦」を示す「鄰笛」と「山陽」という二つの表現の使用方法を考察する。^④

考察に入る前に、韻律面の考察のための補助線となる諸作品の分類方法を確認すれば、以下の通りである。

諸作品を四つの型、近体／古体に分け、さらに、それぞれを五言／七言に分ける。そして、それぞれの型の分け

方は次のようにする。

「鄰笛」型——「鄰笛」の二字を用いるもの。

「山陽」型——「山陽」の下にもう一字足し、三字で用いるもの。

「鄰笛」分離型——「鄰」「笛」を分離して用いたものや、三字以上で用いていると判断されるもの。

「山陽」分離型——「山陽」と加えた一字以上の文字を分離して用いたもの。

「鄰笛」型を二字、「山陽」型を三字に限定するのは、「思旧賦」を示すのに必要な最低単位がそれぞれ二字と三字であるためであり、さらには、六朝期のほとんどの作品で、二字の「鄰笛」型、三字の「山陽」型が用いられていることから、それぞれが「思旧賦」の典故として基本的な表現であると判断されるためである。そのため、「鄰笛」型と「山陽」の両者が用いられている場合、「山陽」を三字で用いていないものは「鄰笛」型とし、「鄰笛」を二字で用いていないものは、「山陽」型とする。

まずは、近体の「鄰笛」型である。五言が六例、七言が十二例、合わせて十八例見られる。該当する聯を挙げる。

・「鄰笛」型——近体——五言

鄰笛不須吹，驚噴枝頭雪。（旋開梅）方蒙仲

無復老盆飲，空餘鄰笛傷。〔過東里〕 李洪

一聲鄰笛起，淒咽泪如泉。〔十月乙酉西山訖事悼亡二首〕其一 徐瑞

故人難重見，鄰笛不堪聽。〔夜坐懷故友〕 寇準

到此聞鄰笛，離情重惘然。〔五言近體二首〕其二 謝翱

鄰笛殘兵淚，胡琴故國心。〔春景城春草木深〕 劉辰翁

・「鄰笛」型——近体——七言

閑雲不入老人夢，鄰笛似知孤客愁。〔旅游〕 陸游

鄰笛風飄月中起，碧雲為我作愁天。〔觀化十五首〕其六 黃庭堅

地隔里門無俗客，樓高鄰笛有新聲。〔草堂東橋翫月〕 王庭珪

鄰笛不堪頻嘆息，酒爐那得重經過。〔和任屯田感舊敘懷〕 司馬光

情知客淚先難制，鄰笛那堪咽晚風。〔過章戴二首〕其二 劉克莊

鄰笛聲哀不自安，轉移宮調幾多般。〔和人聞笛〕 吳可

厭厭酒病結春陰，鄰笛傳來恨更深。〔餉茶不容少待二絕〕其二 李之儀

鄰笛一聲腸欲斷，騷壇失却倚樓人。〔輓趙秋曉〕其四 李春叟

醉扣西州重回首，山陽鄰笛夜凄其。〔挽于湖〕 沈端節

鄰笛他年那忍聽，人琴此日遂俱亡。〔哭衛卿弟三首〕其二 葛勝仲

幽夢初回漏未央、起聞隣笛倍淒涼。（「夜聞隣笛」蒲壽晟）

此夕巷歌誰忍發、他年鄰笛自應悲。（「挽趙秋曉」其一 黎善夫）

五言詩は、二字＋三字で意味を分けるのが一般的であり、七言詩は二字＋二字＋三字で分けるのが一般的である。意味の分かれと「隣笛」の使用部分に着目すれば、「隣笛」は、五言詩であれば、偶数句・奇数句ともに二字、三字のいずれの部分にも用いられ、七言詩であれば、偶数句・奇数句ともに二字、二字の部分に集中して用いられているのがわかる。

次に、古体の「隣笛」型である。五言が三例、七言が二例、合わせて五例見られる。

・「隣笛」型——古体——五言

不如聽隣笛、就其舉杯甌。（赴刁景純招作將進酒呈同會）梅堯臣）

暮齡多感慨、鄰笛更須吹。（「挽林計院二首」其二 劉克莊）

愁心正紛如、西風韻鄰笛。（「暮景」其一 楊冠卿）

・「隣笛」型——古体——七言

不須隕涕悲鄰笛、亦對鬆筠為感傷。（「過此極宮感道士卓玘遺跡因賦詩以續諸公哀辭」孔武仲）

柳州先友二一數、山陽鄰笛令人愁。（「送樊眉州」李流謙）

まず、注目すべきは、近体での使用が十八例あるのに対して、古体での使用が五例に留まることである。近体詩が成立して以降も、古体詩は依然として作られ続けていたが、宋詩全体の量としては、近体の方が多くと考えられる。その差がここに表れていると見ることもできようか。

また、近体の「鄰笛」型と同様に、五言・七言・奇数・偶数の別無く、いずれの場所でも用いられている。古体というところで、平声による押韻を守る必要がないため、一例だけではあるが、仄字である「笛」で韻を踏む例も見られる（楊冠卿「暮景」其一）。

次に、近体の「山陽」型である。五言が三例、七言が一例、合わせて四例見られる。

・「山陽」型——近体——五言

會續山陽賦、鄰人笛未橫。（「魏元履國錄挽章二首」其二 呂祖謙）

腸斷山陽賦、看君氣一蘇。（「醉中五言一首送楊叔與昆仲」孫應時）

欲哭山陽笛、鄰人亦不存。（「哭所知」謝翱）

・「山陽」型——近体——七言

何須更聽山陽笛，欲近西州涕自垂。（丙申閏月領揚州與京師諸公別戊戌十一月受詔還閣首尾僅三年爾然原叔伯庸隱甫子奇

公南清卿之翰昌言八人者皆已徂謝感之愴然作七言寄滑州正臣密學給事」劉敞

近体の「鄰笛」型に比べると、まず、使用数に差がある。同じ近体であるのに、その使用例が十八首（「鄰笛」型）と四首（「山陽」型）とでは、何らかの理由によって偏りがあると判断される。また、使用箇所注目すれば、全ての作品で奇数句の末尾三字に用いられている。これは三字で用いられるという点と「山陽（○○）」という平仄の組み合わせ、平声による押韻・下三連不可の規則を考慮すると、近体では、使用できる箇所が奇数句の末尾三字に限られてしまうという唐代に見られた傾向と同じである。

次に、古体の「山陽」型である。五言が二例、七言が一例、合わせて三例見られる。

・「山陽」型——古体——五言

感慨西州門，愴恨山陽篇。（「買船至演平拜建康劉公墓下遂入城假館梅山堂感涕有作」朱熹）

似聞山陽郊，迓者立堵牆。（「送羊侯因簡崔帥一首」陳造）

・「山陽」型——古体——七言

廣陵琴與山陽笛，哀怨千年尚未平。（「讀史六首」其四 陸文圭）

使用例が少ないのは、「鄰笛」型と同様に、近体の方がより多く作られていたという要因が考えられる。さらに、近体の「山陽」型と同様に、使用箇所が三字部分に限定される点も挙げられる。近体と異なるのは、平声による押韻を守る必要がないため、偶数句の末尾三字部分にも見られることである。

ここまで、「鄰笛」型と「山陽」型を近体・古体に分けて確認してきたが、それらをまとめると次のようになる。

	近体	鄰笛	山陽
古体	五例	四例	三例

「鄰笛」型、「山陽」型の両者とも、近体が多く、とりわけ近体の「鄰笛」型の多さは目を引く。これは、一応は、「山陽」型が使用しにくいものであったと考えることができる。しかし、宋詩全体の作品数の違いとも考えられる。

ここまででは、対象を二字の「鄰笛」型、三字の「山陽」型に絞って考察を加えてきた。

それでは、次に、それぞれが句あるいは聯のうちで分離して用いられるものを確認したい。

まずは、「鄰笛」分離型である。近体では、五言が三例、七言が七例、合わせて十例見られ、古体では、五言が一例、七言が二例、合わせて三例見られる。

•「鄰笛」分離型——近體——五言

東鄰夜夜客，莫放笛聲哀。〔十月梅花〕文同

西鄰聞夜笛，哀淚一霑巾。〔挽何漢卿〕陸文圭

鄰館笛三弄，譙樓鼓二通。〔三山旅夜〕真山民

•「鄰笛」分離型——近體——七言

夜香燒斷黃昏月，縹緲鄰家玉笛吹。〔絕句〕其二 楊冠卿

鄰家羌笛莫生事，春在洞房深更深。〔墨梅〕釋寶曇

鄰家夜夜誰吹笛，每輟燈前數葉書。〔閒居〕方回

秋光蕩漾滿行色，鄰舟吹笛不堪聞。〔江行〕其二 汪涯

生憎哽咽鄰家笛，彼自追歡我自悽。〔鄰笛〕張明中

東鄰畫鼓西鄰笛，共慶豐年樂有常。〔隆岡書院四景詩〕其三 朱熹

一枝已覺春光破，不恨南鄰笛裏風。〔次韻邵公濟尋梅三首〕其一 郭印

•「鄰笛」分離型——古體——五言

鄰家琴聲悲，精爽竟難挽。〔妾薄命〕白玉蟾

・「鄰笛」分離型——古体——七言

里中耆舊今已無、忍聽鄰人更吹笛。〔得東南書報亂後東都故居猶存而州北松檟亦無毀者〕 晁公邁
親朋正感鄰舍笛、風雨復對重陽盃。〔重陽對菊得開字〕 方梓

近体七言の郭印「次韻邵公濟尋梅三首」其一是、二字で「鄰笛」を用いているが、意味の分かれを考えると、該当句は、「不恨」「南鄰」「笛裏風」と分けるべきであり、二字の「鄰笛」型とは言えない。

二字の「鄰笛」型に比べると、字数や使用箇所を気にする必要がなく、多様な用いられ方が見られる。しかし、一点、指摘せねばならないのは、張明中「鄰笛」、朱熹「隆岡書院四景詩」其三、方梓「重陽對菊得開字」の三例は、三字の「鄰笛」型であり、いずれも使用箇所が奇数句の末尾三字である点である。唐詩においても、三字の「鄰笛」型は、奇数句の末尾に限って用いられており、措辞的な点から言えば、三字の「鄰笛」型は、「山陽」型と同じ用いられ方がなされていると考えられる。

用例の量としては、近体が十例、古体が三例とやはり、近体が優位を占める。

次に、「山陽」分離型である。近体では、五言が二例、七言が七例、合わせて九例、古体では、五言が見られず、七言が二例、合わせて二例見られる。

・「山陽」分離型——近体——五言

山陽懷舊笛，腸斷不堪聞。〔哭郭仲微三首〕其二 宋祁

登樓正多感，一笛起山陽。〔殘暑〕 周密

•「山陽」分離型——近体——七言

若到龍門更聞笛，定知悲感似山陽。〔嘉祐中余尹河南與少師李公明龍圖董巨源集賢王伯初同遊龍門漁者得鱖魚數十尾以

助杯梓飲興皆歡日月云邁幾二十年感舊念游作憶鱸詩乃思鱸之比也〕其一 文彥博

獨感舊遊移岸谷，山陽疏笛淚泫泫。〔贈張齋郎〕 宋祁

飄零劍外參謀客，愴惻山陽感舊人。〔予昔爲河東漕屬吏部郎中呂得和出總漕計與予情均兄弟後開府荆渚惠書有人生難得

相知之語予後官守鎮京兆聞呂之訃因發篋得舊詩感而作此〕 李復

山陽舊客誰相識，疴病區區又到來。〔和才翁行次山陽〕 沈遵

贍喜相逢各強健，免教聞笛賦山陽。〔程言聚散有感次前韻〕其一 陳造

嵇呂成塵不可覓，滿襟清淚憶山陽。〔江上聞笛〕 蒲壽晟

雪曲我應慙郢下，笛聲公自感山陽。〔程簿能靜袖詩來訪次韻〕 陳傑

•「山陽」分離型——古体——七言

擬求勾漏還丹術，忍賦山陽懷舊篇。〔挽葛簽判二首〕其二 劉宰

張侯清吟句挾霜，肯因聞笛賦山陽。〔次韻張秀才題汪叔量挹秀亭〕其二 陳造

「鄰笛」分離型と同様に、「山陽」分離型も、多様な用いられ方がなされているのが確認できる。また、「鄰笛」分離型と同様、近体での使用例が多い。これも、近体詩がより多く作られたということが理由の一つと考えられるが、九例中の約半数、五例で平声である「山陽」の「陽」字を韻字に用いていることからすると、むしろ、三字に限らずに「山陽」型を用いることで、近体での使用例が増えたとも考えられる。

ここで、分離型についてまとめると、次のようになる。

		鄰笛(分離)	山陽(分離)
近体	十例		九例
古体	三例		二例

「鄰笛」分離型・「山陽」分離型ともに、近体の方が多く、ほとんど同じ割合である。次に、「鄰笛」型、「山陽」型、双方の分離型をまとめてみると、次のようになる。

		鄰笛	鄰笛(分離)	山陽	山陽(分離)
近体	十八例		十例	四例	九例
古体	五例		三例	三例	二例

「鄰笛」型と「鄰笛」分離型を合わせて三十六例（近体二十八例・古体八例）、「山陽」型と「山陽」分離型を合わせて十八例（近体十三例・古体五例）見られ、両者とも近体が優位を占める。

また、程度の差こそあれ、四つの型全てで近体が優位を占めることは、近体詩と古体詩の総数の差による差として片付けることもできるが、そうであれば、「山陽」型でもより差がつくはずではないだろうか。「山陽」型を除く三つの型では、いずれも近体では古体の三倍以上の使用例が見られるのに対し、「山陽」型では、一例の差でしかない。また、「山陽」分離型は、「鄰笛」分離型とほとんど変わらない使用例の数、割合が見られる。

つまり、分離して用いることで、近体の規則に則りながら、多様な表現を作ることができるといふことから、「山陽」分離型は、「山陽」型としての特徴である、三字によって「思旧賦」を示すという点から解放され、それにより、韻律に沿った使用箇所にも捉われずに用いられているということである。言い換えれば、「鄰笛」型の優位は、「山陽」型に対する近体詩の規則によって生じる限定による、ということであり、唐詩での結論と矛盾しない。

第二章 意味の面——派生という運動

宋代における「思旧賦」に基づく典故表現の使用は、韻律の面から見た場合、唐詩と同様の用いられ方をしているが、意味的に見た場合も同じなのだろうか。

結論から言えば、主題に関わるものとして用いられた際には、六朝期・唐代と同様に、選択された表現と意味には特定の繋がりや存在しないが、主題を引き立てるために用いられた際には、ある傾向が見られ、示す意味も、六朝期・唐代で用いられた意味からずらして用いるものも見られる。

第一節 「今は亡き友人を悼む」

まずは、六朝期・唐代でもに見られた、最も「思旧賦」における設定に忠実な使用がなされているものを確認したい。

次の詩は、近体五言の「鄰笛」型である。

「夜坐懷故友（夜坐して友を懷故す）」 寇準

西風起窮巷，衆木又彫零。

蕙浦月華白，竹窗燈影青。

故人難重見，鄰笛不堪聽。

行傍秋池上，孤吟對遠星。

【大意】西風が狭い裏通りに吹き起こり、全ての木々も萎み枯れだす。香草の生える岸辺に月光が白く輝く、竹林に面した窓は灯の影が青く伸びる。友人に再び会うことは難しく、向秀が聞いたように鄰から聞こえてくる笛の音は悲しみがこみ上げ聞いていられない。秋の池のほとりを進みながら、一人で遠い星に向かってこの詩を詠う。

寇準（九六一—一〇三三）は、北宋初期の剛直な忠臣とされる。「故人」がいかなる人物かはわからないが、特定の人物を念頭に置いて、「鄰笛」を用いていると考えられる。また、背景が詳らかでないため、「故人」が亡くなって

いて会えないのか、あるいは、遠く離れた地にて会えないのか、判別できないが、ここでは、ひとまず「故人」を替康に、自身を向秀に擬え、「今は亡き友人を悼む」という構造で用いられていると解したい。

続いて、次の詩は、近体五言の「山陽」型である。

「哭所知（知る所を哭す）」 謝翱

總戎臨百粵，花鳥瘴江村。

落日失滄海，寒風上薊門。

雨青餘化血，林黑見歸魂。

欲哭山陽笛，鄰人亦不存。

【大意】軍を統べる將軍・文天祥は古来、百越と呼ばれる南劍州（今の福建省南平市）に司令部を置き、瘴気のたちこめる川辺の村で、杜甫の詩に出てくるように、花に涙し、鳥にも心を驚かせつつ、私たちは別れた。日が沈むように南宋の幼帝昺が入水あそばせ、寒風吹きさすさぶ大都（今の北京市）に將軍は連行された。真っ青に降りしきる雨の中処刑された將軍の血は碧玉と化し、黒々とした森林に將軍の魂が帰ってきた。替康を悼んだ向秀のように私も笛の音に將軍の死を嘆こうとするが、その笛の音を響かせる鄰人さえここにはいないのだ。

謝翱（一二四九—一二九五）は、南宋に生まれ、祖国の滅亡を経験した。この作品は、「所知（知る所）」と明言はしていないが、文天祥（一二三六—一二八三）を哭したものとされている。謝翱は一時期、文天祥の幕下にいたようで

あり、忠誠を貫いて処刑された文天祥を嵇康に擬え、その友人を悼む謝翱自身を向秀に擬えており、「思旧賦」に忠実な典故の使用と認められる。

以上二首、「今は亡き友を悼む」という構造で「鄰笛」型・「山陽」型が用いられたものであり、悼まれる人物が特定か不特定かという差異はあるが、六朝期から続く最も多く見られる用い方である。⁶

「思旧賦」を典故として用いた最古の作品である顔延之「五君詠」は詠史詩として詠まれたが、宋詩にも歴史を主題とした作品として、次のようなものがある。古体七言の「山陽」型である。

「讀史六首」其四 陸文圭

廣陵琴與山陽笛，
哀怨千年尚未平。

正始諸賢零落盡，
山王去作晉公卿。

【大意】嵇康が処刑に際して弾いた琴曲「広陵散」と山陽に響いた笛の音、その悲しみは千年たった今もまだ治まらない。正始年間を生きた諸賢はばらばらになったが、山濤・王戎は竹林を去って西晋の高官となった。

陸文圭（一二五六—一三四〇）は、南宋滅亡後、隠居し、度々招聘を受けるが応じなかった人物とされる。この詩は一首全体で、「竹林七賢」の終わりを描いており、嵇康が処刑され、それぞれが自身の道を選んでいく中、西晋の高官となった山濤・王戎が取り上げられている。「五君詠」も山濤・王戎が高官になったことから、「七賢」から除

いて、「五君」として作られたとされており、伝説化された「竹林七賢」という一つのグループを前提に詠われている。しかし、本稿の注目する「思旧賦」に基づく典故という観点から見れば、嵇康・向秀の故事から何らかの意味を汲み出した表現ではない。⁽⁸⁾

唐代では、離別詩の流行が見られたが、それに伴い、別れを疑似的な死と捉えた「思旧賦」に基づく典故表現がいくつも見られた。宋代においても、送別の場や別れを思い浮かべ、「思旧賦」に基づく典故を用いた作品が見られる。次の詩は、近体七言の「山陽」分離型である。

「贈張齋郎（張齋郎に贈る）」 宋祁

青絲垂領稱華簪，結駟千門別第深。

學舍問詩衣五綵，家庭佐酒壽千金。

蘋蘭媚婉供晨膳，碧草生塘動晝吟。

獨感舊遊移岸谷，山陽疏笛淚沔沔。

【大意】あなたは黒々とした髪が首に垂れ煌びやかな簪を挿し、お宅は四頭立ての車や多くの門がある屋敷は広い。学びやでは豪華な五色の服を着た息子さんが詩を学び、お宅で陪席して御息女の誕生を祝った。広々とした庭に咲いた赤い蘭は朝ご飯とともにし、青々と草や池は昼の吟詠に揺らめいた。私は一人、昔ともに山谷に遊んだことを思い出し、向秀がまばらに聞こえる笛の音に悲しみがこみ上げたように涙が止まらない。

宋祁（九九八—一〇六一）は、北宋の人で、歐陽修とともに『新唐書』の編纂を行った人物である。「張齋郎」は、いかなる人物か詳らかにしないが、「齋郎」とは、祭事を扱う役職である。一見すると「張齋郎」が既に亡くなっているとも取れる内容だが、詩題に「贈」とあるところから、「張齋郎」は生存しており、過去の楽しい思い出を思い出し、離別の悲しみを詠っているのだろう。⁹⁾

また、笛は漢代から言及が見られるが、元々異民族の楽器として中華に入ってきており、唐代では、しばしば辺塞詩に詠われている。純然たる辺塞ではないが、都から離れた土地や、都市から都市への旅路において、笛が想起されたようで、「旅路」というコンテキストにおいて、笛が描かれるものがいくつも見られる。

次の詩は、近体七言の「鄰笛」型である。

「旅游」陸游

壯志蹉跎雪滿頭，久將餘日付滄洲。

閑雲不入老人夢，鄰笛似知孤客愁。

小築聊須傍蘭渚，片帆那復到梓樓？

生涯草草真堪笑，三十年來一破裘。

【大意】 壮大な志を果たせずに既に白髪頭となつてしまい、久しく保養して暇ある日、滄洲を訪れた。ゆったりと浮かぶ雲は老人の夢には入ってこず、鄰から聞こえる笛の音は孤独な旅人の悲しみをわかってくれているようだ。小ざっぱりとした小屋でしばらく休むと近くには蘭の咲く美しい中州が見え、帆を斜めに張った舟は

故郷まで行ってくれるだろうか。思えば私の人生は乱雑で誠に滑稽だ、三十年来ずっとこのボロ着で過ごしてきたのだから。

陸游（一一二五—一二二〇）は、宋代を代表する文人の一人である。詩の内容は、年老いて官職から離れた後の旅先での感慨を描いている。ここでの「鄰笛」は、友人が亡くなったことを悼んでいるのではなく、孤独な旅人の悲しみを「鄰笛」の示す悲しみに喩えるのに用いられている。先に見た「離別の悲しみ」は、離別を死に擬えており、この詩では、旅路での孤独を友人の亡くなった孤独に擬えているのだろう。¹⁰

「今は亡き友人を悼む」という構造をそのままに、離別を死に擬える唐代から見られる用い方から、「旅路での孤独」を友人の死によって残された者の孤独に擬える用い方へと、意味を少しずつずらして用いられているのがわかる。

唐代の辺塞詩の多くでは「羌笛」という表現が用いられ、「思旧賦」に基づく典故が用いられることはほとんどない。離別の悲しみという連想から都から離れた旅路において、「思旧賦」に基づく典故が用いられるようになったと考えられる。¹¹

「思旧賦」に描かれるのは、嵇康と向秀の在りし日の友情であり、それは、とりわけ個人的なものである。そこから派生した、離別や旅路というコンテキストも、個人的なものであり、六朝期から唐代にかけては、「思旧賦」に基づく典故は、個人的な諸関係や状況を描くのに用いられたと言える。

しかし、宋代の詩においては、個人的とは言いがたい難い関係・状況を描くのに用いられているものが見られる。

次の詩は、近体五言の「鄰笛」型である。

「春景城春草木深」 劉辰翁

春又不知暮，城荒獨至今。

樓臺花下遠，草木雨中深。

寒食無烟綠，頽垣有月侵。

荒苔隨意古，落子又成陰。

鄰笛殘兵淚，胡琴故國心。

廢興天不語，鐘鼓遍園林。

【大意】春は尽きたけれど春の終わりがわからず、街は荒れ果ててただ一人今に至る。高殿は花の咲き乱れた遠くに見え、草木は雨の降る中繁っている。寒食節のため炊事の煙は上がらず、崩れた土塀からは月の光が射しこんでいる。苔は気ままに年月を経て、落ちた木の実も影を作る。鄰から聞こえる笛の音は敗残の兵の涙を催し、胡の琴は祖国を偲ばせる。国家の興廢について天は語らず、鐘や太鼓の音が園林に響く。

劉辰翁（一二三二—一二九四）は、「愛国詞人」として知られる、南宋の文人である。

この詩は、杜甫の五言律詩「春望」の第二句「城春草木深」を主題に、春の景色を描くが、本当に描きたいのは、杜甫詩第一句「国破山河在」だろう。杜甫が安史の乱の後の荒廢した長安を描いたように、この詩も、南宋の滅亡後の荒廢した街を描いている。「鄰笛」は「敗残の兵」とともに用いられ、ここでは、劉辰翁自身を比喩していると考えられるが、殊更、憂国の詩を残した杜甫の詩を掲げるところからすると、むしろ戦に敗れ生き残ってしまった

全ての人を代表していると考えた方が良いと思える。戦争という国家規模の状況をコンテクストに、「鄰笛」を用いるのは、他に例を見ないが、個人的な感慨にのみ用いていた唐詩とは異なった典故利用と考えられよう。

ここまで、「今は亡き友人を悼む」という構造に準じた典故表現を用いた宋代の詩作品を見てきた。典故の表す意味に注目して、六朝・唐代との比較をすれば、六朝期の作品のほとんどで見られた故事に沿った「今は亡き友人を悼む」という構造は、唐代に入ると、意味をずらして「離別の悲しみ」を表すのに用いられた。宋代では、加えて「旅路の孤独」を描くのに用いられ、また、個人的な感慨を述べるだけでなく、国家規模の悲しみを表現するのにも用いられた。これらは帰納すれば、「今は亡き友人を悼む」という構造に収斂されてしまうものかもしれないが、意味をずらすことで、新たな意味・表現が生まれるという、典故という文学的機能の運動を示す一例と見なすことができるだろう。

第二節 「笛の音の素晴らしさ」

本節では、六朝期から見られる「笛の素晴らしさ」という意味で用いているものを確認したい。近体七言の「鄰笛」型である。

「草堂東橋翫月」 王庭珪

坐看冰輪碾太清，赤欄橋下水先明。

光從蟾兔窟中出，人在鯨鼉背上行。

地隔里門無俗客，樓高鄰笛有新聲。

此時迴絕非塵境，更聽天雞第一鳴。

【大意】座つて眺めれば水のように冷たく輝く月が天空を切るように移り、その光を受けて赤い欄干の下では水が明るく光る。光につられて蟾や兔は穴から出て、人は鯨や大亀の背に乗つて水上を進む。ここは村里から離れ俗っぽい客は訪ねて来ず、高殿は高く鄰の家から聞こえる笛の音には新しい響きがある。このような時間が続くことは俗世ではないのだ。さらに天空にいるという鶏の朝を告げる声に耳を傾けよう。

王庭珪（一〇七九—一一七二）は、北宋から南宋にかけて江西廬陵で活躍した文人である。政和八（一一一八）年に進士及第するも早くに官を捨て隠遁した。

この詩は、自身の草堂を仙境に擬え、その清新さを描いているが、ここで用いられる「鄰笛」に、悲しみのイメージは読み取れない。「有新聲（新しい響きがある）」と言うところからすると、笛の音の素晴らしさは向秀が聞いたものと同じだが、悲しみとは異なるイメージを喚起する調べだと言いたいのだろう。¹²⁾

さらに、より明確に「鄰笛」を否定することで、他のものを強調するような用い方も見られる。次の詩は、近体五言の「鄰笛」型である。

「旋開梅」 方蒙仲

鄰笛不須吹，驚噴枝頭雪。

主人日日來，長見開時節。

【大意】向秀の聞いたような悲しい調べ（「鄰笛」）を吹くには及ばない。枝の先には雪のような梅の花がはぜるように花開いている。主人は日々来て、この開花の季節をずっと眺める。

方蒙仲（一一二四—一二六二）は、官は秘書丞に至ったが、時の権力者・賈似道に従うことをよしとせず、地方へ出た人物とされる。また、梅をテーマにした作品を多く残しており、この詩もそのうちの一首である。

この詩では、「鄰笛」によって示される友人の死や別れなどの悲しい調べを否定し、それによって梅の花を眺めることをより強調している。よって、ここでは「鄰笛」は悲しい調べとしての意味しか持ち得ていない。

右のように、春の訪れを言祝ぐために「鄰笛」が否定されるものに次のものが見られる。該当する聯のみ挙げる。

一枝已覺春光破，不恨南鄰笛裏風。（「次韻邵公濟尋梅三首」其一 郭印）

【大意】梅の一枝はすでに春が来たことに気付き、本来なら悲しい調べである南鄰りから聞こえる笛の音に含まれる南風を恨むことはない。

鄰家羌笛莫生事，春在洞房深更深。（「墨梅」 釋寶曇）

【大意】鄰の家の笛の音はやかいかい事を起こすことはなく、春は夫婦の寢室の深い上に更に深いところにある。

さらに、春ではないが、早咲きの梅を詠うものもある。

東鄰夜夜客，莫放笛聲哀。（「十月梅花」一文同）

【大意】東鄰の人よ、毎夜毎夜悲しい調べを響かせないでくれ。

以上の四首全てが「鄰笛」型を用い、梅を詠うという共通点がある。¹³全てが「鄰笛」だからと言って、春を描くに用いられるのは「鄰笛」型であるとは言えないだろう。しかし、典故の用い方という点で見落とせない点がある。「鄰笛」という語は、「笛」字を用いるため、六朝期から向秀に嵇康を悼ませるほどの「笛の音の素晴らしさ」を表現するのに用いられてきた。

そもそも、「鄰笛」という語は「思旧賦」に端を発したものであり、「今は亡き友人を悼む」という構造とは切り離し難く、「笛の音の素晴らしさ」を表現する場合でも、「悲しい調べ」というイメージはついて回る。唐代では、「今は亡き友人を悼む」という構造に準ずるものや「悲しい調べ」というイメージを含んだ「笛の音の素晴らしさ」の二つの意味が主題を表現するために用いられていたが、右の四首では、その「悲しい調べ」というイメージが比較対象として用いられている。つまり、これまで主題に関わるものとして用いられてきた「鄰笛」が、主題を引き立てるための道具として用いられているということである。

比較対象とするのであれば、「悲しい調べ」というイメージを有していれば充分であり、嵇康や向秀の関係を想起し易い「山陽」という語よりは、「悲しい調べ」というイメージを抽出しやすい「鄰笛」型が採用され易くなる。こ

の点が、韻律面における「鄰笛」型の優位と相まって、春の訪れを言祝ぐのに「鄰笛」型のみが用いられている要因と考えられる。よって、特定の意味と表現との結び付きがあるとは認められないが、用い方の傾向として、主題として悲しみを詠うのでなければ、「鄰笛」型の方が使用され易いということになる。

六朝期に、詩という表現方法に「思旧賦」典故が持ち込まれ、社会情勢や流行などの加勢により、主題として用いられることになったが、その用い方が一般的になってくれば、更なる変化を求め、比較対象へと詩中における地位が下がったと考えられる。しかし、これまで通りの用い方も依然として見られるため、「思旧賦」典故の価値が下がったわけではなく、より多様性を持つに至ったと考えるべきだろう。

おわりに

本稿では、詩という表現形式において、向秀「思旧賦」が典故としてどのように用いられているのか、という点について、宋代の作品を考察してきた。六朝期から唐代を経て宋代に至る間の「思旧賦」典故の変遷として最後に簡単にまとめておく。

まず、韻律の面。六朝期では、近体詩の成立前ということで、句として韻律を整備することは、個々人による試みはあったにせよ、一般的ではなかったため、句中の位置に対する制限は強いものではなかった。しかし、その中でも、「山陽」を用いた際には、「山陽(○○)」という平仄に合わせるため、下には「笛(●)」などの仄字を用いている。これは句のレベルではなく、語のレベルでの韻律を意識的・無意識的に志向していたことを示している。ま

た、「思旧賦」を示すために用いられる表現として、「鄰笛」型と「山陽」型の二種類が見られたが、「思旧賦」を典故として用いた最古の作品である顔延之「五君詠」の影響の下、「山陽」型が優位を占める（「山陽」型六首、「鄰笛」型二首）。

唐代に入ると、古体詩は引き続き作られ続けるが、徐々に近体詩が増え始め、「思旧賦」を示すのに用いられる表現にも変化が見られ、唐代全体で見れば、「山陽」型十二首（近体七首）に対して、「鄰笛」型十九首（近体十四首）と、使用頻度は逆転する。これは、韻律の整備により、近体詩では、①「山陽」型は三字で意味を成し、②下三連不可避けて「山陽笛（○○●）」という平仄となり、さらに、③平声で押韻するために、使用箇所が奇数句の末尾三文字にしか用いられない、という三点によって使用箇所が制限されてしまうことにより、より自由度の高い「鄰笛」型が用い易くなったということに負っている。

右の傾向は、宋代でも見られ、特に「鄰笛」分離型と「山陽」分離型との使用数の差に表れている点は第一章にて述べた通りであり、宋代の作品を確認することで、六朝期から唐代にかけての韻律面における表現選択の要因を確認することができたと考える。

次に、意味の面。「思旧賦」は刑死した嵇康を向秀が悼むという内容であるため、典故として用いられる際にも、「今は亡き友人を悼む」という構造で用いられる。また、向秀に哀悼の気持ちを喚起させるほどの「笛の音の素晴らしさ」という意味での使用も見られた。

前者の構造は、唐代には「死者―生者」という関係に移され、宋代に至っては、「旅立つ者―残る者」という関係や、さらに派生して「旅路での孤独」を示す用い方へと意味をずらした用い方が見られる。コンテキストも個人的

なものから国家規模に拡大する作品もある。

後者は、六朝期に引き続き唐代でも、「笛の音の素晴らしさ」を示すために用いられており、そこでは、「思旧賦」の内容に沿った用いられ方がなされ、主題として、あるいは、主題に関わるものとして用いられていたが、宋代に入ると、主題を引き立てるための道具として用いた作品が見られた。これは、「思旧賦」の典故としての価値が下がったのではなく、友人等の死を悼むような「思旧賦」に沿った場面以外でも用いることができるようになったということがある。その際、「鄰笛」型が使われたということは、「笛」字を用いることで、「悲しい調べ」という意味を抽出し易かったためと考えられる。

注

- (1) 拙稿「六朝詩における「思旧賦」」(『人文研紀要』第八五号 二〇一六年九月三〇日、五三―八二頁)、拙稿「唐詩における「思旧賦」」(『紀要(言語・文学・文化)』第一二二号 二〇一八年二月一日 一六一―一八四頁)を参照されたい。
- (2) 宋詩の引用は全て北京大学古文獻研究所編『全宋詩』(北京大学出版社、一九九一)を用いた。
- (3) 本稿における数量・割合は、現存する作品のうちでの数字であることから、現存する作品によるという限定的な考察となる。
- (4) 本稿では、行論の都合上、対象となる詩作品を上記二つの型に振り分けたが、宋代の詩作品で「鄰笛」型・「山陽」型に分けられない「聞笛」の使用例は次の一首のみである。黄庭堅「雨晴過右塘留宿贈大中供奉」長虹垂地若篆字，晴岫插天如畫屏。耕夫荷耒解襪，漁父曬網投笊箸。子期聞笛正懷舊，車胤當窗方聚螢。獨卧蕭齋已無月，夜深猶聽讀書聲」。唐代では、「鄰笛」型・「山陽」型の他に「聞笛」を用いた「聞笛」型が一定量見られるため、唐代における「聞笛」使用の点からの考察も必要となるが、稿を改めて考察したい。

(5) この詩では、死に関わる典故が多用されている。例えば、詩題「所知」は、『禮記』を踏まえ、野原にて哭することを言い（『禮記』「檀弓上」）「伯高死於衛，赴於孔子，孔子曰：『吾惡乎哭諸？兄弟，吾哭諸廟；父之友，吾哭諸廟門之外；師，吾哭諸寢；朋友，吾哭諸寢門之外；所知，吾哭諸野。於野，則已疏；於寢，則已重。夫由賜也見我，吾哭諸賜氏。』遂命子貢為之主，曰：『為爾哭也來者，拜之；知伯高而來者，勿拜也。』」第五句「化血」は、周の敬王に仕えた袁弘が讒言に遭い、郷里の蜀に帰って自殺したが、三年後その血が碧玉に変化したという故事を踏まえ（『莊子』「外物」篇「人主莫不欲其臣之忠，而忠未必信，故伍員流於江，袁弘死於蜀，藏其血三年，化而為碧。」）、第六句「歸魂」は、『楚辭』に見える招魂のための言葉を踏まえ（『楚辭』宋玉「招魂」「湛湛江水兮上有楓，目極千里兮傷春心。魂兮歸來哀江南！」）、さらに第六句「林黑見歸魂」全体は、李白が永王璘の反乱に巻き込まれ、獄に繋がれ、夜郎に流されたことを聞いた杜甫が夢に李白を見たことを踏まえる（杜甫「夢李白二首」其一「魂來楓林青，魂返關塞黑。」）。また、謝翱は、実際に楚歌を作って文天祥の魂を呼んでいる（謝翱撰「西臺慟哭記註」）「作楚歌招之曰：『魂朝往兮何極？莫歸來兮關塞蒙。化為朱鳥兮有珠焉食？』」。

(6) 友人等を悼むのに「思旧賦」典故を用いたものに、次のものがある。李洪「過東里」、徐瑞「十月乙酉西山訖事悼亡二首」其一、司馬光「和任屯田、感舊敘懷」、劉克莊「過章戴二首」其二、李春叟「輓趙秋曉」其四、黎善夫「輓趙秋曉」其二、沈端節「挽于湖」、葛勝仲「哭衛卿弟三首」其二、劉克莊「挽林計院二首」其二、孔武仲「過此極宮感道士卓杞遺跡因賦詩以續諸公哀辭」、陸文圭「挽何漢卿」、白玉蟾「姜薄命」、呂祖謙「魏元履國錄挽章二首」其二、劉敞「丙申閏月領揚州與京師諸公別戊戌十一月受詔還閣首尾僅三年爾然原叔伯庸隱甫子奇公南清卿之翰昌言八人者皆已徂謝感之愴然作七言寄滑州正臣密學給事」、朱熹「買船至演平拜建康劉公墓下遂入城假館梅山堂感涕有作」、宋祁「哭郭仲微三首」其二、文彥博「嘉祐中余尹河南與少師李公明龍圖童巨源集賢王伯初同遊龍門漁者得鱸魚數十尾以助杯杔飲興皆歡日月云邁幾二十年感舊念游作憶鱸詩乃思鱸之比也」其二、李復「予昔為河東漕屬吏部郎中呂得和出總漕計與予情均兄弟後開府荆渚惠書有的人生難得相知之語予後官守鎮京兆聞呂之訃因發篋得舊詩感而作此」、劉宰「挽葛簽判二首」其二、黃庭堅「觀化十五首」其六、晁公邁「得東南書報亂後東都故居猶存而州北松檟亦無毀者」、周密「殘暑」、李之儀「餉茶不容少待二絕」其二、張明中「鄰笛」、方梓「重陽對菊得開字」、楊冠卿「絕句」其二、方回「閒居」、蒲壽晟「江上聞笛」、陳傑「程簿能靜袖詩來訪次韻」等がある。

(7) 「顔延之伝」に「作五君詠以述竹林七賢、山濤王戎以貴顯被黜」とある（『宋書』、北京、中華書局、一九七四年、第一

版、一八九三頁)。

- (8) 楊冠卿「暮景」其一では、「愁心正紛如，西風韻鄰笛。(愁いはまさに入り乱れ、西からの風は「鄰笛」のような悲しい調べが響くようだ)」のように、特定の人物を悼むのではなく、物悲しい景色・心情を描くために用いられている。この場合、「思旧賦」の向秀・嵇康の関係や感情を基にした「今は亡き友人を悼む」という構造から「悲しい調べ」というイメージを抽出しており、「思旧賦」に描かれる関係は、詩全体にとって重要ではなくなる。この用い方は、詩の主題に沿った用い方ではあるが、「今は亡き友人を悼む」という構造に添いつつ、イメージのみを抽出するという点で、「今は亡き友人を悼む」という構造に準じるものとは少しくレベルが異なる。また、陳造「次韻張秀才題汪叔量挹秀亭」其二では、「張侯清吟句挾霜，肯因聞笛賦山陽。(張侯の清らかな詩を吟じ、その詩句は霜を挾むかのようであり、聞こえてきた笛の音色を用いて「思旧賦」のような素晴らしい作品をお作りになった。)」と言うが、元の作品を特定できないため、本稿では、張某の作品を褒めるために用いたものと考えたい。

- (9) 離別の際に用いられている例として、孫應時「醉中五言一首送楊叔與昆仲」、謝翱「五言近體二首」其二、梅堯臣「赴刁景純招作將進酒呈同會」、李流謙「送樊眉州」、陳造「程言聚散有感次前韻」其一、沈邁「和才翁行次山陽」、陳造「送羊侯因簡崔帥一首」等がある。

- (10) 旅路や旅先での用例は他にも見られ、蒲壽成「夜聞隣笛」、汪涯「江行」其二、真山民「三山旅夜」等がある。

- (11) 唐代の辺塞詩には、笛が描かれることが多々見られる。辺塞詩における笛の存在については稿を改めて考察したい。

- (12) 「笛の音の素晴らしさ」を示すために用いられるものに、吳可「和人聞笛」、朱熹「隆岡書院四景詩」其三などがある。

- (13) 「鄰笛」と梅には何かしらの関係があるのだろうか。しかし、この関係については、宋代のみではなく、他の時代の作品との比較対象を経たうえで、考察する必要があるので、稿を改めるべきだろう。